SENSHOJI
YUKARI NEWSLETTER
1994-2023

ゆかり通信
VOL.307
令和５年８月

北海道千歳市清水町1-14　鶴寶山 千正寺
TEL:0123-23-2442　FAX:0123-24-9883
ホームページ http://sensho-ji.net/ フェイスブック @Senshoji

2023年千正寺カレンダー　８月の言葉

北の守り・航空祭

人生は長さじゃない。
深さです。幅です。
（金子大栄氏）

「婦人公論」という雑誌に載っていたお話の一部を紹介させていただきます。
清水光代さんは、８年前に息子の昌也さん（仮名）をがんで亡くした。享年３６歳。「息子が死んだあと、みなさんの言葉が胸にささりました。『子どもが親より先に死ぬなんて、あってはならない』。でも、あの子は好きで親より先に死んだわけじゃない。私を悲しませはしたけれど、親思いのいい息子だったし、幸せな思いをたくさん味わうことができたんです。

『まだ若いのに、かわいそう』『心残りがいっぱいあったろうに』という言葉にも落ち込みましたね。そうか、あの子は人生を十分に楽しむことができないまま死んだのだ。不幸な子だったんだ。産んだ私の責任だと思って、自分を責めました」

そんな時、光代さんは自宅を訪れた友人に、「あれ、見た？」と聞かれる。何のことかと思えば、座敷の棚のそばに掛けてある月めくりのカレンダーのことだった。昌也さんが亡くなった４ヵ月前でストップしたままのカレンダーをめくってみると、今月の言葉としてこうあった。「人生は長さではない。深さである」――。

「これまで何度も耳にしたことのあるこの言葉に、このときはハッとしました。心に沁みたというか。そう、息子が生きた時間はほかの人たちよりも短いし、家庭をもち子どもの親になることも叶わなかったけれど、あの子なりに３６年の人生を精いっぱい生きたのなら、それでいいと思えたんです。そう信じたいと……」その後、光代さんが昌也さんの会社へ挨拶に行くと、同期の仲間や同僚たちが昌也さんを偲ぶ会を開いてくれた。そこで語られるエピソードの数々には、光代さんの知らないわが子の姿があった。

「みなさんから話を聞き、たくさんの写真を見ると、そこには一所懸命に仕事に取り組み、楽しそうに仲間たちと遊び、恋もし、青春を謳歌している息子がいました。あの子はこんな日々を送っていたんだ。短い人生だったけど、幸せだったんだと思うと、すっと心が軽くなりました」

８年経った今も昌也さんの友人たちが墓参りに来てくれる。電話で近況報告を知らせてくれる人もあり、毎年の命日には光代さん宛の手紙と線香が届く。
「こうしたご縁も、亡くなった息子からのプレゼントですよね。寂しさはあるけれど、息子も私も決して不幸ではなかった」

亡くなった人のことを決して忘れはしない。そのうえで、遺された人が充実した人生を送ることが故人の望みであり、また、見守られているという思いが、そのあとを生きる人にとって励みともなるのだ。

どうでしょうか。私は僧侶として沢山の人のお葬儀に関わりますが、若い人のご葬儀に関わると「まだまだお若いのに。家族の方もお辛いですね」と反射的に言ってしまいそうになる自分がいます。そして、その気持ちは今後も変わらないと思います。ですが、この記事に出会ったことで早世は悲しいことであるけれど、決して『悲しいだけ』で終わらせてはいけないという見方を得させていただきました。

（文：行武秀明法務員）